



体験活動を織り交ぜネパールの生活を学ぶ

報告者 千葉県千葉市立高浜第一小学校

山根 充世先生

1. 活動のねらい

本校では、「自らの課題を持ち、進んで追求しようとする児童の育成」を研究主題に社会科の研究を進めている。そして社会科では「世界の中の日本の役割について、地図や地球儀、資料などを活用して調べ、我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考えるようする」学習が新学習指導要領に盛り込まれた。世界の国々の位置を理解し、文化や習慣の違い、平和の大切さを理解する。そして世界の中での日本の役割を考えるのである。だが、本学級の児童は、世界への関心があるとすれば、かろうじてオリンピックやメジャーリーグなどのスポーツだけで、世界地理や世界のニュースには全く興味をもっていない。本校の研究主題は「自らの課題を持ち、進んで追求しようとする児童の育成」であり、自分の課題を持たせる、進んで調べようとするには、子どもの心を強く打つ資料が必要であった。そこで同じアジアの国にありながら、戦争や食糧難によって命の危険にさらされている子どもたちの姿をユニセフの資料から知らせ、自分たちができるを考える活動へと結びつけていこうと考えた。

ユニセフの方をゲストティーチャーとして招待し、世界の現状を話していただいた。同時にユニセフの活動について語っていただき、現地での活動の様子や苦労話など生の声を聞いて、国際交流や世界の様子について実感をもって考えられるように工夫した。また、国際連合の活動や世界平和と世界の環境を守るためにの努力などを詳しく調べ、自分たちに何ができるのかを考えさせていった。

2. 指導計画

時 間	主 な 学 習 活 動
第1時	世界で活躍する日本の人たちに関心をもち、調べたい内容を考える。
第2時	青年海外協力隊の人たちの思いや努力を調べる。
第3~4時	国際連合のはたらきについて、ユニセフやユネスコ、WHOなどの活動を調べる。
第5時	ユニセフの活動や目的に関心をもち、自分たちに何ができるか考える。
第6~7時	地球の環境を守るために国際連合やNGOなどの活動を調べ、日本の果たす役割や自分ができることを考える。

3. 実践

(1) ユニセフとは？

この単元だけでユニセフの活動を理解するには、とても時間が足りない。そこで、社会科と総合的な学習の時間を活用し、事前に別の内容で取り扱った。そこでは、ユニセフの主な活動を簡単に紹介し、いろいろな分野で支援していることを子ども達に伝えた。

<戦争の被害>

社会科で第二次世界大戦の単元に入ったとき、「戦争」をテーマに内容を広げた。昭和の時代に起こった戦争と現代も続く紛争に目を向けさせ、今も苦しんでいる人たちがいることを学習した。ここでも、ユニセフの方をゲストティーチャーに呼び、『難民キャンプのワークショップ』と『地雷の恐怖』について語ってもらった。

「みなさん、もし隣の国で戦争が始まり、自分たちの住んでいるところにも被害が及ぶとしたら、どうしますか？」

戦争の恐ろしさを実感できない子ども達。ワークショップで配られたプリントから、必要な荷物をカバンに詰め込むために、楽しそうに声を上げながら、話し合いが進む。

- ・お金は必要だから、持って行ったほうがいいよ。
- ・通帳があれば、お金を下ろせるから大丈夫だよ。
- ・マンガを持って行きたいな。
- ・非常食は、大切だから絶対に持って行こう。



通貨の価値はもちろんのこと、難民という言葉の意味を全く知らないのが現状であった。ワークショップが進むにつれ、海賊や台風、船の沈没により荷物がどんどんなくなっていく。子ども達の表情から、だんだん笑顔がなくなり、生き抜く大変さを実感しているようだった。

そして助けを求める国の人々に言葉が通じなくて、なかなか入国できない。やっと入国でき、たどり着いたキャンプ地で待っていたのは、水や食料がない状態でのテント生活である。ワークショップが終わった後、ため息がこぼれた。お腹がすいたら、冷蔵庫を開ければよい生活。冷蔵庫に何もなかったら、スーパーやコンビニに駆け込めば、何でも揃ってしまう贅沢な暮らし。とても恵まれた環境で生きていることを改めて感じたようだった。



そして、今もなお戦争で苦しんでいる人たちがいることを知つてもらうために、地雷の話を聞いていただいた。地雷で片足や腕を失う子ども達が、たくさんいることを知る。「これが爆発するのか・・・。」と恐る恐る手を出す。地雷をマジマジと観察し、手に取って重さを比べている。種類も豊富で、戦車を吹き飛ばせる物があることに驚いていた。

また同じ歳の子どもが「少年兵士」として戦場に行かされ、多くの命を落としている現状も知った。この話を聞いている間にも、たくさんの命が失われている。

「何故、戦争が起こるのだろう。」「どうして戦争をやめないのでだろう。」子ども達の思いが広がっていく。そこで一人一テーマを決め、調べ学習を進めていくことにした。個人での発表会を計画し、内容を広げず詳しく調べることを重点においた。世界で起こっている紛争、地雷について、少年兵士などたくさんのテーマに分かれたが、本やインターネットを活用しまとめていた。教師側から声をかけなくても、発表の後に募金を呼びかける子どもが何人もいた。

(2) 世界の現状

世界では様々な問題を抱えている国が多い。環境問題を始め、食糧難や不衛生な環境で暮らしている人が多くいる。しかし、どのくらいの規模で誰がどのように支援しているのかは、知らない子どもがほとんどであった。

そこで、世界で活躍する日本人を挙げイメージマップをつくった。スポーツ選手や青年海外協力隊、ユニセフといった今まで学んできた言葉がでてきた。さらに国際連合の働きを調べ、他にも多くの団体があることを認識する。その中から、募金活動も行ったユニセフについて取り上げ、授業を実践した。

<世界の水問題>

世界中に貧困で苦しむ人々や病気で命を落としてしまうような暮らしをしている国はたくさんある。食糧難や学校に行けない子ども達など、取り上げるテーマはたくさんあるが、体験活動を通して学ぶことを考えたときに、とても身近で自分に置き換えて考えることができるだろうと思い、水問題に焦点をしぼった。

【学習の流れ】

- ① 「危険な水しか飲めない子どもたち」がいることを知らせる。
- ② 自分の生活を振り返り、朝起きてから何回水を使ったか考えさせる。

- ・顔を洗ってトイレに行った。
- ・朝ご飯をつくって、お皿を洗うときに使った。
- ・水やココアを飲んだ。
- ・花に水をあげた。
- ・洗濯をするときに使った。



※日本では、これらの水が蛇口をひねれば、すぐに出てくることをおさえさせる。そして、世界には水道が整備されていない国が多くあり、どのように生活しているのだろうかと投げかけた。

- ③ ユニセフが支援している「ネパール」を地球儀で探す。
※「山脈」「都市の様子」「学校」「子ども達」の写真を掲示し、その写真の情報をヒントにどこの国かを考えさせた。山脈という言葉から、ネパールの地形は標高が高く、水道を引くことが難しいところだということに気づいた子どもがいた。
- ④ ネパールの人が実際に使っている水瓶に水を入れ、運んだ感想を発表する。

- ・ものすごく重いよ。
- ・持つことはできるけど5kmも歩けない。
- ・険しい山道を歩いたら、水がこぼれそうだ。
- ・せっかく運んでも、あんな汚い水は飲みたくないね。
- ・9時間も働いていたら、学校はどうするのかな。



⑤ ゲストティーチャーから、ユニセフの具体的な活動や支援の話を聞く。

- ・下痢で命を落としている子どもがたくさんいる。
- ・経口補水療法でたくさんの命が助かった。

⑥ 自分だったら何ができるか、同じ立場だったら何をしてほしいかを考え、ノートにまとめる。

- ・募金は大切な。
- ・えんぴつやノートなどの文房具も不足していると聞いたことがあるよ。
- ・絵や手紙を送ったら喜んでくれるかな。
- ・水を届けてあげたい。
- ・井戸を掘りに行く手伝いをしたい。

ゲストティーチャーから、5才未満の子どもが『3秒に1人亡くなっている、下痢では1日に4000人亡くなっている』という事実を聞いたとき、驚きの声があがった。その原因の80%が水であることがわかった。汚い水を飲むことで下痢になり、脱水症状を起こしてしまうことを知り、川の水が手に入っても決して安全ではないことを学んだ。

そして授業の最後に、お小遣いから出すのだけが募金ではなく海外旅行であつた小銭や古切手も募金につながるということを補足してもらった。身近なことから出来ることを探していくこうという気持ちで学級全体がまとまった。

4. 成果と課題

学習を始めるまでは、世界のことなど全く関心の無かった子ども達であった。なぜ食料や学校がないのか、援助する必要のある国がまだあるのか、募金はどんなことに使われているのか、など自分の生活に置き換えたり、想像したりすることが出来なかった。ネパールの子ども達が水を運ぶとき、どんな道具を使うと思うかと質問したとき、「ポリタンク」や「バケツ」と答えた子どもがいた。日本ではすぐ手に入る道具だが、それらを作る技術もお金もないことを理解するのが難しいようだった。またユニセフの活動内容を調べても、身近な問題ではないからなのか、話し合いをしても表面的な感じがしてならなかつた。

しかし、ゲストティーチャーから詳しい話を聞き、パネルや地雷など実物を見て、考え方があわってきたことを感じることができた。授業で水瓶を見せてもらい手に取ったとき、驚きの表情と声があがった。見た目と違って重量が結構ある。その重い水瓶を持って高低差のある道を1日に何往復もしなくてはならないという事実を知ったとき、何かをしてあげたいという本気の言葉が出てきた。そして自分と同じ歳の子ども達が苦しんでいることを知り、学習が進むにつれ、その事実を多くの人に伝えたいと思うようになっていった。募金活動を実践する子どもやペットボトルのキャップを回収して、ワクチンを寄付しようと提案した子どももいた。

今回、本やインターネットだけでは知ることができない内容に触れることができ、深みのある学習ができた。子ども達も五感をフルに活動し、授業に取り組んでいた。そして、もっと世界の様子を知りたいという思いが広がった。この思いが、このまで終わってしまわないように、今後も学校全体に呼びかけ継続して取り組めるようにしていきたい。